



福井グリーンパワーの大野発電所は24時間体制で操業している（福井県大野市）

## 闇に輝く林業の支え

深夜に福井県大野市の郊外を車で走っている。田んぼの真ん中に白く輝く建造物がはつきりと見えてくる。福井グリーンパワー（大野市）の木質バイオマス発電所だ。県内を中心とした間伐材を燃料に24時間体制で稼働する。闇夜に目立つその姿には福井県内では数少ない工場夜景としても注目が集まる。

総工費約40億円をかけた、2016年4月に営業運転を開始した。敷地内には多くの原木が並べられ、次々と燃料用の木質チップに加工されている。年間発電量は約5500万キロワット時と一般家庭で約1万5千世帯分にあたる。大野市の全ての一般家庭の消費電力を上回る計算だ。

1年に燃料として使う9万〜9万5千トンの木材のうち、7〜8割が県内の産となっている。本来は山に捨てられていた間伐材を同社が買い取ることによって価値が生まれ、県内林業の振興につながる。現在県内で生産している木材のうち、3分の1程度をこの発電所で消費している。

福井グリーンパワーは、神鋼環境ソリューションが70%を出資して事業主体となっている。同社から出向し、設立当初から携わってきたという福島秀行専務は「木質バイオマス発電の運営は会社としても初めて。地元社としても初めて。地元から林業活性化の提案を受け、1年半の間検討を重ねた」と振り返る。面積の9割を森林が占める大野市や地元の森林組合、福井県の後押しを受け、この場所への設置が決まった。

社員約25人はほとんどが大野市の出身。年30日の点検期間を除き、2交代制で24時間体制の稼働が続く。「あくまで夜間の保守点検のための光」と福島専務は笑うが、その輝きはときおりSNS（交流サイト）でも話題になる。発電所の周囲は柵で囲われているものの、敷地内に立ち入らなくても夜景の撮影は可能だ。

さらに地元にも貢献できないかと、燃焼後の灰を肥料にするなどの再利用方法も検討している。再生可能エネルギーの固定価格買い取り制度（FIT）の適用はいざ終わるため、先行きが不透明な部分もある。ただ、「福井の林業を守りたい」という思いは変わらず、今夜も白い輝きを放ち続けている。（鈴木卓郎）